

ウェブを活用した社会調査の新展開

東京大学 藤原翔

1 目的

Hernán et al. (2019) は、データサイエンスの目的を、記述、予測、そして反実仮想的予測（因果推論）の3つに分けている。近年では因果推論に注目が集まり、社会学の分野でもその適用が試みられている (Morgan and Winship 2014)。しかし、通常の横断調査には限界があるし、縦断調査に拡張しただけでは因果関係に対して部分的にしかアプローチすることができない。一方で、公的統計データを含めたビッグデータが利用できると、従来の社会調査が今後どのような方向に進んでいくべきなのかを考える必要がある。本報告では、より柔軟な項目の設計と実査が可能なウェブを活用した実験・社会調査の可能性について議論する。

2 ウェブ調査の活用

新しい社会調査の展開を考える上でのキーワードをいくつか上げておきたい。それは(1)ウェブ調査、(2)縦断調査・パネル調査、(3)スノーボールサンプリング・ネットワーク、(4)実験、(5)自由回答、(6)アウトカムの測定、(7)事前情報の把握・予測である。これらを相互に関連させることもできる。例えば、実験的な方法では因果効果（平均処置効果）を明らかにすることが可能であるが、通常社会調査のように個人の属性についての情報を得ることで、因果効果の異質性についても同時に検討することが可能となる。因果推論が社会学にはうまくマッチしないという考え方があるのかもしれないが、因果効果の集団差（処置効果の不均一性）に注目するというアプローチは、集団的な特徴を測ってきた社会学の枠組みとの相性もよい。例えば、近隣の因果効果が黒人と白人でどのように異なるのか、学歴が収入に与える因果効果が出身階層によってどのように異なるのかなどはすでに米国の社会学によって取り組まれている課題である。また一度ウェブ調査で登録・協力依頼を行うことができれば、継続的に調査を行い、パネルデータを構築できる。そうすれば変化の正確なタイミングを捉えた因果推論が可能であり、選挙や制度改正前後などのタイミングにあわせて調査を行えば、速報性を重視した調査報告も可能となっている。自由回答をうまく活用することも重要である。計量的メカニズム分析では、変数 X と変数 Y の間に存在する変数 M を考え、それが X が Y に対してもつ因果効果を説明するのかどうかを分析してきた。このような分析に関してはその強い仮定に対応するための方法も開発されているが、自由回答を活用したメカニズム探索を考えることができる。メカニズムに関して、変数の「決め打ち」（確証的なメカニズム分析）ではなく、トピックモデルを活用した X と Y を媒介するような探索的因果分析も可能だろう。

3 結論

ウェブ調査では実験と社会調査の統合が可能となってくる。他にもセンシティブ情報の獲得、友人紹介によるデータ構築などが可能となる。社会学的な問いを重視しつつ、まず何ができるのかという想像力が求められる。『ビット・バイ・ビット』(Salganik 2017=2019) はこのような新しい社会調査を考えるうえでの重要な成果である。代表性がないからウェブ調査を行わない、あるいはコストが安いからウェブ調査を行う（通常社会調査の補助的な位置づけ）という時代ではない。